
魔法少女リリカルなのはー原作破壊者ー

ユニコーンデストロイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはー原作破壊者ー

【Nコード】

N5362M

【作者名】

ユニコーンデストロイ

【あらすじ】

ある墮神に無理矢理強制的にリリカルなのはの世界に落とされた主人公。しかも何か最強ばいチート能力を与えられた。チート設置、原作ブレイクに耐性の無い方は読まないことをお勧めします

それでは、魔法少女リリカルなのはー原作破壊者ー始まります

プロローグ（前書き）

いやあ、一度こうゆうの書いてみたかった。

他にも連載している小説が有るので、更新が遅いと思います。そこから辺は心の広い方なら許してくれると信じ、あえて余り言いません。それでは始めます

プロローグ

さて、今から帰ってなのは見て寝るかな

ん？ああ、俺？俺の名は時雨真鬼しぐれまさきってんだ

アニオタやってるんだ。宜しくな

今はアニメイトに行ってDVD買って帰宅するところだ

いつものようにアニメDVD買って寝る前にリリカルなのは見て・
・という生活を繰り返している

真鬼「さあて。A、sの何話見て寝ようかな。・・・・・・・・あれ

？何か視界が暗くなって・・・・・・・・」

バタッ

俺は帰り道に倒れた

道のと真中で・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっこっ

は何処だ？！何で真っ白？！訳わかんねえぜ？！

はっ！ひょっとしてこれは・・・・神が間違っただ俺を殺して御詫び
に転生させてくれるフラグじゃあ・・・・

？？？《残念。転生は合つとるが間違っただ殺した訳じゃない》

何ざやと！どうゆうことだゴルラァ！

神《口が悪いな。さっき言った通りだ。お前にはこれからある世界で原作ブレイクしてもらう》

な・ん・じゃ・と・？

選べないの！選べないのかゴルラァ！

神《ふん。いいんだよ。俺の気紛れだから》

気紛れで俺殺すな！アホか貴様！

神《まあ、軽く無視して……》

無視すんな？！

神《お前にはこれからチート能力を与える。これは俺が決める》

これも間違いじゃね？

神《だまらっしゃい。このアニメ知識しか脳の無い馬鹿者め》

お前の方が口悪いな

神《まずお前に行って貰う世界は、「リリカルなのは」の世界だ》

ふえ？マジで？

マジだ
神

いよつつつつしややややああああ！

早くチート能力をくれ！さあ早くしろ！今すぐしろ！

神《現金な奴。まあ、与える能力は、まず始めにリンカーコア魔力とネギまの魔力と氣だ。全てSSSクラスの奴。次に、インテリジエンスデバイスとテッククリスタルとライダーベルトだ。ライダーベルトはディケイドドライバーでいいな。》

チートすぎじゃね？てかテッカマンブレードとかまたマニアックな物を……

神《テッカマンブレードは俺の御氣に入りのアニメだ》

アニメ見てるのかよ

神《さて、長話も終わったからデバイスに名前付けて登録してさっさと行け》

全ての拒否権無いのね

あるわけなえだろ
神

ホントに神の癖に口悪いな。神みんなそうなのか？

神《いや。俺だけだ。俺は墮神だからな》

そんなとこ威張るなよ

神《早くデバイス登録しろ》

へいへい

デバイス 私の名前を決め、マスター登録して下さい

OK・・・愛称は青龍^{せいりゅう}、名称は青龍霸韌^{せいりゅうはじん}。術式は色々。登録。

青龍 登録完了。次にバリアジャケットをイメージしてください

うん。めんどいからFFのクラウドみたいな長いあの黒の革コートをいいや

青龍 登録完了しました。何時でもセッティング可能です

うし。終わった

神《よし。終わったのなら早く行け》

墮神がそう言った瞬間、足元に黒い穴が・・・・・・・・・・で、こんなところばかりデフォるなーーーーー!!!!!!

俺は落とされてしまった・・・・・・・・あの墮神に・・・・・・・・

ああ。俺の行く末はどうなることやら・・・

ブローグ（後書き）

よし。何か無理矢理話し進めた感があるが大丈夫と信じよう

1 行きなり強制介入？てかチート過ぎてヤバいな（前書き）

真鬼「死ネ」

作者「ちよつとまでえええい？いきなりは無しだろう？理由を聞け？」

真鬼「言い訳は見苦しいぞ・・・作者」

作者「まあ待て？まずは聞け」

真鬼「・・・・・・・・・・しょうがないから聞いてやる」

作者「有り難う。えゝまずひとつ目、ここまで投稿が遅れた理由が・・・・・・・・他県へ出張に行っていたからだ。詳しくは企業秘密のために言えぬが・・・・・・・・山のほぼど真ん中の為に携帯の電波が全く来なかった為である」

真鬼「それは知っている。だがそれも二週間で帰ってきたから理由にならん」

作者「二つ目が・・・・・・・・二つ目が・・・・・・・・フタツメガ・・・・・・・・無いわ」

真鬼「やっぱ死ね？ボルテッカー？」

作者「ぎゃああああああああああああああああ」

ブスッブスッ

真鬼「まあ黒焦げになつとるがいいか。ええこんなアホでだらしく、尚且つ忘れっぽい作者だが・・・暖かい目で見てやってください。何とか頑張らさせて完結ができるようさせますので・・・」
それでは始まります」

1 行きなり強制介入？てかチート過ぎてヤバいな

あんの野郎！いきなり落としやがって！死ぬかと思った！

真鬼「あつ！今気づいた。俺住む場所と金どうしよう・・・」

青龍 マスター、ご安心を。神より住む場所と通帳を預かっています

そう言つて青龍は住所と通帳を出した

え？通帳をどうやって出したかつて？それは青龍がデータ化してそれをまた再構築して出したよ

真鬼「てか何？この金額は・・・」

0が20個もあるよ

青龍 9千京円です

何という単位まであんだコノヤロー

これだけあれば一気に日本経済回復するぞ

青龍 マスター。30km先で結界と魔力反応を感知

え？いきなりなの？

真鬼「しょうがねえな。早速お仕事しようか」

青龍 イエッサー。マイロード

そして俺は空を飛び、魔力反応があつた場所に向かった

なのは

私は家に居たらいきなり結界が張られた。私は、これはなにかある
と思つて現場に向かった

そしたら、そこには、赤いゴスロリ服を着て、帽子には兎のぬいぐ
るみを付けて、ハンマーの形をしたデバイスを持っている少女がいた

「……」

私は無言でこつちを見ている子に話し掛けた

なのは「君はいつたい誰なの？何でこんなことしたの？」

「……」黙れ。貴様の魔力。奪う！」

ヒュッ

なのは「あっ！」

レイジングハート プロテクション

キャキイーンッ

???「そんなもん！」

ピキピキ・・・

なのは「?!ヒビが！」

なのはのプロテクションにヒビが入り砕け散った

なのは「キャアアアア！」

ドゴオオンッガラガララッ

そしてなのはそのまま吹き飛ばされビルに当たった

真鬼

真鬼「さて。そろそろ・・・。」

青龍 介入ですか？マイマスター

真鬼「いや。まだだ。フェイトが出てきてからだな。お・・・。
来たな」

さてと・・・ボチボチ普通の人がやらないと思う介入法をしよう

かな

フェイト

私が鳴滝に来たら知らない術式の魔法結界が張られていた

フェイト「これは一体・・・」

なのははもう現場に行つてると私は思った

この結界、何故かわざと誰かを誘き寄せるかのように張つてあつた

フェイト「なのはは無事なのかな・・・」

???「なのははそう簡単にはやられないからそんなに心配しなくても大丈夫だよ」

フェイト「そう・・・だね。ユーノ」

ユーノと呼ばれるちよつと存在感の薄い少年がフェイトの横を飛んでいた

ユーノ「存在感の薄い少年って何その説明!？」

フェイト「ユ・・・ユーノ!どうしたの?!いきなり叫んで・・・」

「

ユーノ「あ・・・いや。何でもないよ。フェイト」

フェイト「そう。ならいいけど……。ユーノ、最近無限書庫でちよっと無理しているみたいだから体壊さないように適度に休んでね・
・・」

ユーノ「うん。心配してくれてありがとう。フェイト」

フェイト「うん・・・」

何だかんだ話している内に現場に到着した

しかし、そこでフェイトとユーノが見たものは・・・なのはが劣勢に立たされ、その瞬間にビルに叩き付けられた時だった

フェイト「なのは！！ユーノ、早く結界の中に入ってなのはを助けないと！」

ユーノ「うん！直ぐに結界に穴を開けるよ！」

ユーノは結界を中和し、穴を開けてフェイトと共に結界内に侵入し、なのはの所に向かった

なのはルート

????「死ねや！」

なのは「ううっ！」

私はここで死んじゃうんじゃないかと思った
でも、直ぐに私は嬉しい気持ちで一杯になった

ユーノ「なのは・・・大丈夫？」

なのは「ユーノ君・・・」

???「ちいつ！仲間か」

フェイト「友達だ・・・大人しく投降し、武装を解除すれば君には
弁護の機会が与えられる」

???「あんだあテメエ！管理局の魔導師か・・・？」

私は最近、定番となった名乗りをする

フェイト「時空管理局囑託魔導師・・・フェイト・テストロッサ」
???「へっ！投降なんかするかよ！」

フェイト「あ！まで！ユーノ・・・なのはをお願い」

ユーノ「分かった」

なのははボロボロの体を無理に起こそうとした

なのは「ユーノ・・・君」

ユーノ「喋らないで。傷を治すから今はゆっくりしてて。なのは」

なのはは声に出さずに頷き、目を瞑って身を任せた

真鬼ルート

真鬼「さてと青龍君・・・・・・・・どうやって結界に穴を空けようか？」

俺は自分のデバイスに聞いた

青龍 マスターならちよつと力業では有りますが、無理矢理結界を中和して中に入ることが可能です

真鬼「分かった。だが先ずは・・・・・・・・青龍霸靱・・・・・・・・セットアップ？」

青龍 イエッサー、マイ・マスター。セットアップ

そして俺はバリアジャケットを着た
そう言えばいい忘れていたが青龍はセットアップ後はツインセイバーになる

簡単に言つと双剣だ・・・・・・・・しかし力業かあゝ
よし、頑張るか

俺は結界に手を掛けた

中和イメージはエヴァンゲリオン初号機の一話に出た使徒のＡＴＦ
イールドの中和シーン

バチバチバチ

激しくバチバチ言つとるが何とか結界に穴を開けた

真鬼「ねえ、青龍？今俺がやったやり方で他の魔導師は結界に穴を
開けられる？」

青龍 不可能です。マスターにさ出来ません

即答かよ

てか何その序盤からのチート全開な状態・・・・・・・・・・例えるなら、
ネギまのジャック・ラカン並のチートだな

あの人も結界を気合いで壊して脱出してたな

とか考えていたらフェイトがヴィータと戦つとるな

この分だとシグナムとシャルが出てくるのも時間の問題だな・・・

・誰とやろうかな

そうだ

顔が分からないように何かしとかないと管理局に目を付けられてし
まうな

よし・・・・・・・・・・テッカマンブレードになろう

真鬼「よし・・・・青龍。テッカマンブレードにテックセットだ」

青龍 マスター・・・・テックセットは不可能です。私の中にはテッ
クシステムがありません

何ですと？

真鬼「どうやってテッカマンブレードになれと？」

青龍「マスターのポケットの中にテッククリスタルが入っているはずです」

そう青龍が言ったのでバリアジャケットのポケットの中を物色中

真鬼「つか今更だが、いちいちセットアップしなくても最初からブレードになつていた方が無駄な手間が無くて楽だったじゃん……」

とか言っていたら

真鬼「おっ……あつたあつた。そんじゃま……テエエエックセッタアアアア？」

その瞬間、俺の体は白い鎧に包まれた

真鬼「テッカマンブレード？」

だが……

真鬼「うおっ？うざ？なんで耳元でREASONのメロディーが流れるの？」

青龍 雰囲気盛り上げる為だそうです

真鬼「いらん機能を付けてくれたな……」

まあいいや

真鬼「さあ〜て……ブレイクを初日から行きますか」

フェイトルト

私が今相手している子とはとてもない魔力を持っていた
とゆうのも瞬発的に魔力が上がったりしているからだ

フェイト「あれは一体？」

女の子が持っているデバイスは何か銃の空薬莢みたいな物を排出していた

ヴィータ「アイゼン？」

グラーファイゼン「カートリッジ・ロード」

フェイト「っ？バルディッシュ？」

バルディッシュ「イエス、サー」

フェイト「サンダーレイジ？」

ヴィータ「ラケーテンハンマー……？ぶち抜けえええ？」

真鬼「テックランサー？」

キイインツバチイッ

ヴィータ「んなっ？」

フェイト「ええ？」

真鬼「どうも〜こんばんわ」

フェイト「え・・・えと・・・こ・・・こんばんわ」

ヴィータ「くそっ？てめえも局の魔導師か？」

真鬼「ん〜残念だけど違うな・・・俺は漆黒の闇を照らしに来ただけ」

ヴィータ「はあ？」

フェイト「???」

分かつとらんな・・・まあ当たり前か
さてどうしたらいいものか
お・・・なのはの居た所から結構な魔力反応が出てるな
SLBを射つ気だな

なのはルート

フェイトちゃんが私を襲った子と闘ってる……
ふえ？誰々？あの全身真っ白な鎧着た人は？しかも物凄い魔力を持つてるの？あの人、絶対私とフェイトちゃんより強い人だ……
フェイトちゃんを助けないと

なのは「レイジングハート……ちょっと無理するね」

レイジングハート オーケー・マイマスター

これが私が今出せる全力全開の魔砲……

なのは「スターライト……へ？」

キーン

何？どうなっているの？何で私の体から腕が出ているの？しかも何だか痛い……

なのは「くうう……ブレイカー……」

なのはのスターライトブレイカーは展開されていた結界に当たり……
結界が壊れた

そしてなのははそのまま気絶した

真鬼ルート

真鬼「青龍。シャルの居場所は？」

青龍 キヤチしました

真鬼「よし。ヴィータはフェイトに任せて俺達はシャルの所に行くか」

そして俺は上手く戦闘から抜け出してシャルの元へ向かった

1 行きなり強制介入？てかチート過ぎてヤバいな（後書き）

作者「ふつかーっ？」

なのは「何で私だけやられているの？しかも一方的なの？」

フェイト「な・・・なのは？落ち着いて」

作者「何かね・・・頭に出てきた事そのまま書いたらこうなった」

なのは「作者さん・・・ちょっと向こうでO H A N A S I
しよ・・・」

作者「え・・・まってまって？落ち着け？ぎやあああああああ
ああああああああ？首が・・・首が絞まるから襟首掴まない
でえええ？そんなことするから皆に悪魔だの悪魔だの悪魔だの悪魔
だの悪魔だの白い悪魔だの言われるんだ？」

フェイト「作者さん・・・化けて出ないでくださいね」

真鬼「ふん。いい気味だ」

作者「真鬼の薄情ものおお？」

真鬼「まあいつかヒョッコリと出てきそうだな

えゝ作者がなのはに連れていかれたので俺が変わりに・・・
作者はいつかは誰かとコラボ的な事をしたがっているが・・・この
自己満足小説だと無理だな。こんな自己満足野郎ですが・・・」

フエイト「今までの人のなかで一番最悪な人ですが、見捨てないであげてね」

真鬼「それでは次回を楽しみに・・・してる人はいないと思うが楽しみにしていってください」

2 あ・・・あやや？何かね・・・原作と違うところが沢山あるよ？（前書き）

作者「またやつちまったぜ」

真鬼「また投稿遅れたな貴様」

作者「今回は俺が投稿するの忘れていたのが原因や」

真鬼「愚か者め？死ね？死にさせえええ？」

作者「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いテックランサーでつづくなよ？」

真鬼「馬鹿者めが？」

作者「えゝまずは謝罪の言葉を・・・・・・・・遅れてしまいどうもすいませんでした」

真鬼「いい人連れてきたよ」

作者「は？どこから？」

○部さん「お前・・・俺のケツの中でション○○しろ」

作者「ヒイイ？くるな？くるな？・・・・・・・・アーーーーーッ？」

○部さん「凄く・・・・・・・・大きいです」

真鬼「これで少しは反省して真面目にやるだろう……それ
とお見苦しい物を見せてしまい……すいませんでした……それ
では魔法少女リリカルなのはー原作破壊者ー始まります」

2 あ・・・あやや？何かね・・・原作と違うところが沢山あるよ？

真鬼ルート

真鬼「シャルさんは・・・見つけた？（某、赤と黄の人ニコニコ版）」

シャル「？そ・・・そんな・・・どうして居場所が？」

俺は今シャルさんの真横に居る

真鬼「さうと。今やっている事を止める。さもなくば・・・この場で断ち切る・・・」

チャキッ

俺はシャルさんにテックランサーを向けて脅しを掛ける

シャル「くうう・・・」

???「ウオオオオオ？」

ブオンッ

真鬼「うお？チイイ？貴様は・・・？」

俺の目の前には夜天の書の守護騎士にして盾の守護獣ザフィーラが立ち塞がっている

ザフィーラ「シャル？俺が時間を稼ぐ・・・シグナムとヴィータを頼む」

シャル「分かったわ・・・待っててね？ザフィーラ」

ザフィーラ「ああ」

真鬼「あゝあ・・・逃がしちゃった」

ザフィーラ「来い？ここから先は盾の守護獣ザフィーラが一步も通さん？」

めんどくさいな

真鬼「・・・・・・・・・・飽きたから帰らせてもらっわ」

ザフィーラ「どうゆうことだ？貴様・・・敵に後ろを見せる気か？」

真鬼「状況を把握したまでだ・・・・・・・・上・・・・・・・・見てみ」

ザフィーラ「ぬ？」

パリイイイン

シャルが張ったと思われる結界が桃色の砲撃によって破壊された

ザフィーラ「確かに潮時だな・・・去らばだ」

シュッ

真鬼「行っただか・・・さて俺も逃げるかな」

俺はすかさず足下に転移魔法を発動してその場から逃げた

てか名乗り上げただけで何にもしてない俺・・・・・・・・

俺は町から少し離れた場所に着いた

真鬼「さうでと・・・青龍、追跡されてないか？」

青龍 大丈夫です。マスター

そうか

んゝどうしようかなあゝ・・・・・・・・住む場所

青龍 そう言えばマスター・・・・・・・・今後の活動拠点はどうしますか？

真鬼「今それ考えてる」

真鬼「ああ。さてと続き続きつと」

「二つめはなのは達が通う学校に明日から行け」

何でこれだけこんなにも命令口調なわけ？コイツ個人的に俺のこと嫌いだろぅ・・・

「三つめは新たな仮面ライダーがいる次元世界が現れ、そのライダーのベルトの効果を調べると上から命令が来たからお前が色々試してくれ」

うっはゝ(。(。)/やったぜ？また更にチート力アップグレードや

「最後の一つは・・・・・・別の人間がその世界に侵入したから見つけ次第には倒せ」

はいいい？どうゆうことだ貴様？ばっかやろぅがあああああああ？

青龍 マスター・・・・・・どうしますか？その別の人間は？

真鬼「うゝん・・・倒せと・・・いわれてもなあ」

真鬼はその場に座り込み考え始めた

真鬼（確実に倒さないといけないのかなあ・・・・・・でもなあ・・・出来れば戦力は多いことには越したことないから・・・出来れば仲間に引き込みたい）

一時間後

真鬼「決めた。奴さんには仲間になってもらおう」

青龍 断った場合は如何程の処置をしますか？

真鬼「断つた場合は墮神に言われた通り倒さなくてはならないだろうな……多分結構力はあるだろうからな」

青龍
マスター・・・大変です

真鬼「どうした？敵か？」

青龍 朝の5時です。データによれば今日から学校です

NO

真鬼「ヤバイじゃん？どうしよう……て……あっ……
良いこと思い付いた」

俺はポケットからディケイドドライバーを取り出して……

真鬼「变身」

《カメンライド・・・ディケイド》

《カメンライド・・・カブト》

《フォームライド……ハイパーキャフトオフ》

さてコイツで時間を戻しますか

真鬼「いくぜ。過去の時間へ」

《アタックライド・・・ハイパークロックアップ》

キイイイイイイイン

俺は時間を跳んだ

過去三時間前

真鬼「よし・・・到着」

青龍 出力、安定しています

真鬼「ん？」

人影があつた・・・しかもこの世界の服装じゃない

真鬼「おい・・・そのあんた。お前この世界の住人じゃないな。どこから来た？」

「???」「折角あの三國志の世界から出られたのにまた変な奴がいやがった」

真鬼「はあ？何言つてんだよお前・・・・・・・・まさか次元を越えられるのか？」

「???」「物分かりは良いみたいだな・・・・・・・・俺はさっきこの世界に着いた・・・・・・・・だが・・また俺は厄介事に巻き込まれるみたいだな」

何言つてんだコイツ

真鬼「お前言つてる意味がいまいち理解できんのだが・・・・・・・・」

「???」「それは戦えば分かる」

真鬼「くっ？」

奴はそう言つとポケットから何かを出した
俺は奴が出した物を見て驚き、啞然とした

真鬼「なっ・・・・・・・・それは？」

奴が取り出した物はどう見てもディケイドライバーだった・・・・・・・・
ある一点を除いて

真鬼「黒い・・・・・・・・ディケイドライバー・・・・・・・・だと・・・・・・・・」

「???」「俺は人としての名が無い・・・・・・・・俺があるのはライダー

としての名だけ……俺の名は仮面ライダーレクイエム・
……人は俺を世界の終末者と呼ぶ」

くそつたれが？まさかりりなのにまだほとんど介入していないのに
こんな奴にいきなりぶつかるとかよ？
そして俺もディケイドライバーを出し……

真鬼「变身？」

变身を始めた

レクイエム「ほう……貴様も持っていたのか……ならば……
・变身……」

《《カメンライド》》

《《ディケイド》》

《《レクイエム》》

そして俺達は变身と同時にぶつかった

2 あ・・・あやや？何かね・・・原作と違うところが沢山あるよ？（後書き

次回は今月中には投稿できるように頑張ります

3 力と力と説得（前書き）

作者「あははは。短か」

真鬼「なにやってんだよ」

作者「一応予告通り今月中には投稿出来たからある意味よし」

真鬼「ダメだコイツ…………早く何とかしないと」

3 力と力と説得

真鬼ルート

ギャキイイイン

キイイン

ドッゴッドゴコンッ

俺は今、他の世界から来た人間……しかも、仮面ライダーの力を持っている……名を仮面ライダーレクイエムという奴と斬り合い、そして隙あらば蹴ったり殴ったりしていた

真鬼「やべえな。ちとじり貧だぜ……やはり今回は力ではなく経験の違いのせいで押されてきたな」

レクイエム「俺に勝てる奴はやはり……あいつしかいないようだな……」

そう言い、レクイエムはバックルにカードを入れた

《カメンライド……シャドウムーン》

レクイエムの姿は全身がメタリックカラーで機械的な容姿をした仮面ライダーブラックの宿敵にして王の証……サタンサーベルをもつ、仮面ライダーシャドウムーンのそれになる

真鬼「ちいい？シャドウムーンか？ならば……」

《カメンライド・・・ブラックRX》

俺はバツクルにカードを入れ、姿を変えた

太陽の神秘なるパワーにより新たな力を得て復活した太陽の皇子・・・
・・・仮面ライダーブラックRXに変わる

真鬼「行くぜ」

俺はそう言つと、レクイエムシャドウムーンの側まで走つた

バキィイン

ガキィイン

レクイエムシャドウムーンに殴りかかるが全てをいなされな

真鬼（やっぱり修行とかしないで使つてるからまだまだ俺の経験が浅いから全ての攻撃が防がれる）

レクイエム「そろそろ・・・終わりにしなければな」

レクイエムがいきなりそう言ってきた

真鬼「？何故だ・・・」

レクイエム「この世界の時空治安刑事・・・たしか時空管理局だったかな・・・それが近付いている」

真鬼「本当か・・・青龍・・・」

青龍 イエス、マスター

俺は青龍に聞いた

うわゝ管理局には原作介入以外で接触を持ちたくないんだよな
あつそうだ……もし奴がああ神（糞）の言っていた奴なら今の内に説得して……

レクイエム「一ついい忘れていたが、この世界にいるジェル・スカリエツティを知っているだろ？」

な……何でコイツスカリエツティの存在を知ってたんだよ？つかまだストライカーズ始まっていないのに？

真鬼「何でスカリエツティの事を聞く？」

奴はとんでもないことを口から発した

レクイエム「それは……この世界に新たなアンチ系ライダーと怪人を作る為だ」

真鬼「貴様あああ？」

奴はそれを聞き、不適に笑う

レクイエム「ククク……俺は世界の終末者だ……俺の通った世界は草一本、存在すら無い」

真鬼「貴様が心底腐っていて外道なのはよく分かった……
ならば俺は……貴様のその歪みを、破壊する？」

《ファイナルアタックライド……ディディディケイド》

レクイエム「ふんっ」

《ファイナルアタックライド……レレレレクイエム》

ドゴオオオン

二つの力がぶつかり合い爆発が起きた
そして、俺は負けた

3 力と力と説得（後書き）

次の投稿頑張る

例え読まれなくても馬鹿にされても完結させてやる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5362m/>

魔法少女リリカルなのは－原作破壊者－

2011年10月7日01時45分発行